

賢人ヤジニャヴァルキヤとジャナカ王 『ブリハダーラニャカ・ウパニシャッド』からの物語

昔、ヴィデーハの王であるジャナカと偉大な賢人ヤジニャヴァルキヤが、アグニホートラの供犠で語り合っていました。ヤジニャヴァルキヤは前者に、願いを一つ叶えると言いました。王は自分が尋ねたい質問をすることを選択し、ヤジニャヴァルキヤは彼のこの要求を承諾しました。そこで王は尋ね始めました。

「ヤジニャヴァルキヤ、人にとって光の役割を果たすものは何か」

「太陽です、陛下」と、彼は答えました。「なぜなら太陽の光があつてこそ、人は座り、動き回り、仕事をし、そして再び戻るからです」

「その通りだ、ヤジニャヴァルキヤ」

「しかし、太陽が沈んだ時、ヤジニャヴァルキヤよ、その時人にとって光の役割を果たすものは何か」

「その時には、月が人の光となります。なぜなら月の光があつてこそ、人は座り、動き回り、仕事をし、そして再び戻るからです」と、彼は言いました。

「その通りだ、ヤジニャヴァルキヤ」

「しかし、ヤジニャヴァルキヤよ、太陽が沈み、月も沈んだ時、人にとって光の役割を果たすものは何か」

「その時には、火が人の光となります。なぜなら火の光があつてこそ、人は座り、動き回り、仕事をし、そして再び戻るからです」と、彼は言いました。

「その通りだ、ヤジニャヴァルキヤ」

「しかし、太陽が沈み、月が沈み、そして火が消えた時、人にとって光の役割を果たすものは何か」

「その時には、言葉が人の光となります」と、彼は言いました。「なぜなら言葉が光となつてこそ、人は座り、動き回り、仕事をし、そして再び戻るからです。それゆえに、おお陛下、人は自分の手さえ見えない時にも、声が発せられたなら、真っすぐにその方向に向かいます」

「その通りだ、ヤジニャヴァルキヤ」

「しかし、太陽が沈み、月が沈み、火が消え、そして言葉が沈黙した時、人にとって光の役割を果たすものは何か」

「その時には、大いなる自己が人の光となります」と、彼は言いました。「なぜなら大いなる自己が光となつてこそ、人は座り、動き回り、仕事をし、そして再び戻るからです」



ローマ・カトリック教会の神父であり学者だったスペイン出身のライムンド・パニッカー(1918年～2010年)は、宗教間対話の支持者でした。彼の著書『ヴェーダの体験: マントラマンジャリ』の中で、パニッカー博士は、ヴェーダ、アーランヤカ、そしてウパニシャッドを含むインドの教典から多くの節を翻訳しています。

1996年、グルマールはマハーヤートラの教えの訪問でスペインにいた際、シッダ・ヨーガの瞑想ティーチャーであるスワームィ・シャーンターナンダにパニッカー博士に会うよう求めました。数日後にスワームィはパニッカー博士の家を訪ね、二人はパニッカー博士の研究について素晴らしい会話を交わしました。

「彼は聡明な人物です」と、スワームィ・シャーンターナンダは言います。「パニッカー博士は、東洋と西洋の哲学の共通点に興味を持っていました。彼は多くの言語を自在に話し、書きました。彼はまた、音楽を大変愛していました。彼の知識の幅と深さには、忘れ得ぬ印象を受けました」

Brihadaranyaka Upanishad: IV, 3, 1 – 6.

Raimundo Panikkar, trans. *The Vedic Experience: Mantramanjari* (Los Angeles: University of California Press, 1977) p. 334: iii.

